
俺日!季節の特別短編集！！

ポンジュニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺曰！季節の特別短編集！！

【Zコード】

Z7429Z

【作者名】

ポンジュニア

【あらすじ】

現在執筆中の小説【俺の日常非日常】のキャラ達の、季節にそつたお話。言つなれば短編集。

本編とは関係無しの、オリジナルの話です。

俺の日常非日常を読んだこと無い方でも、多分楽しめるはず。

季節にそつて書きあげた特別ストーリーをお楽しみください！！

俺曰く！クリスマス特別編ー（前編）～クリスマスイブの夜～（前書き）

クリスマス特別編です！
前後編となつております。

俺曰！クリスマス特別編！（前編）～クリスマスイブの夜～

やあ、俺だ。山空 海だ。

突然だが、今の俺の現在地は、自宅のリビングのソファの上。
毛布に包まりながら、尋常じゃない寒さに震えているのだ。

現在は午前7時。立派な朝だ。

だが、いつもの朝とはわけが違う。そう、特別な朝。

休日の朝だ。……という事ももちろんあるが、今日はそれだけじゃない。

そう、なんと……今日はクリスマスの前日。
つまり、クリスマスイブの朝なのだ。

今夜がクリスマスイブ。

……え？お前らの世界は八月じゃなかったのかだつて？

ふふふ。大人になりなさい。

これは本編とは無関係の話だ。いわゆる特別編。

季節がじろじろ変わるのはよくある話なのだ。わかつたな？

まあ、そんなわけだ。

俺曰！クリスマス特別編！！（前編）
～クリスマスイブの夜に～

こんなに寒いのに、外はまさかの日本晴れ。
雪が降るどころか、雲ひとつないこの状況。

せっかくのクリスマスなんだから、雪の一つや二つふってくればいいものを……。

じゃないとこの寒さに苦しめられている今の俺が報われん！――

つて、そんな事はどうでもいい。

「うう……寒いな

そう、寒い。

俺の家には暖炉はもちろんストーブもなく、暖まる為の家電製品といえば、暖房、こたつ、そしてホットカーペット。

この三つだ。

だが、暖房は空気が悪くなる。だから俺はあまり使わないのだ。
つまり、残りはこたつとホットカーペット。

ホットカーペットはすでに使っている。

まあ、ソファに座つてたら意味ないのだが……電源を入れたばかりで、まだただのカーペットなんだよ！――

そして、こたつ。

これも現在使用中。

……ああ。分かつてゐる。お前らの言いたい事はすべて分かつているのだ。

矛盾してるよな？ そりなんだよ。そりなんだよ……

「寒い？ カイは何を言つてるんヨカ？ 全然寒くないんヨ」

ブチッ。流石の俺も、頭の中の何かが切れた。

「セツだよ山密。どのへんが寒いんだい？」

ブチイッ。そのひち血が噴き出してくるかもしれん。

そう、こたつは……。

「白々しいんだよお前らー！ 人んちのこたつ^{せたつ}占領するんじやねえよ
！ …！」

こたつは居候一人が占領してゐるのだ。

「なら山空も潜ればいいじゃないか」

「ぞけんなー！ そもそも潜るもんじゃねえよーーー！」

そうなのだ。

肩まで入るぐらいうら、俺のこたつは余裕で平氣。大きいからな。

雪で作つたかまくらの如く、こたつの中に住み着いてるとしたら話は別だ。

でもな。

「この俺に入る余地なし。

「何だよ山室。なら僕達はどうすればいいんだ?」

オメガがこたつの中から聞いてくる。

つまり、『俺には声しか聞こえないぜちっくしょー』状態だ。

「…………あのさ。こたつから出るとは言わねえよ。せめて潜るのをやめろ。顔を出せ」

俺はオメガ達に優しく語りかける。

俺つてば優しいな。

だが、オメガは……

「ほれ」

そつ言つて、少しこたつから何かが出てきた。…………つて

「誰がメガネだけを出せと言つたあ……顔を出せよ……生首の如く……！」

見事にこたつの外に放り投げられたオメガの黒ぶち眼鏡。

メガネのレンズを光らせながら、コロコロと……いや、カツンコツンと、床を跳ねながら俺の足元までやってきた。

……メガネよりもこたつ。

どうしよう。寒さのあまり、頭がおかしくなってしまったのかもし

れない。

まさかこの俺が、メガネに同情する田^たが来るとはな。

「生首の如くつて……表現が怖いん^ア……まつたく

こたつの中から、可憐らしい声が。

「うるさいーそんなことより、顔^{ぐら}に出せよー！」

俺はやはり、寒過ぎていかれていたのだらう。
もうコタツに入ることより、こたつから顔を出でせるに全力を
注いでいたのだから。

「まつたく、これでいいん^アかー！」

ちょ、なんか凄いキレ始めたよコイツ。
しかもこたつから出てきたものは…………まあ、一言でいえば顔だつ
た。

「……確かに顔だけどな。だれが紙に描いた顔を出せと言ったんだ
よおおーー！」

そう、十秒で誰でも書けるような簡単な顔。

せめてもうと頑張って描けただろんじやないのかよ？

眉、眉、目、目、鼻、口で直線6本で出来上がりとか。絵描き歌に
すらならんぞ。

棒が6本ありました、チヨンチヨンチヨンチヨンチヨンチヨーン
で終わっちゃう。

「これだからわがまま將軍は」

メガネを捨てたオメガが眩いでいる。
もつオメガじやねえよ」
イツ。

メガネないからオタクだよ。で、変態のロリコンだよ。

「つか、なんだよその將軍。なんでも將軍にすれば解決! って考え方やめりよ」

わがまま將軍。

多分、相當わがままなのだろ。だって將軍になっちゃったくらい
なのだから。

「そんな変な考え方持つてないじょえ」

おい語尾。

その語尾どうしち「めばえねん。

……つーかさあ、もういいわ。

こうなつたら、俺の華麗なる口説きテクで自分からこいつを出るよ
うに仕向けてくれる!

と、意気込んで告げるはクリスマス。

「クリスマス!..」

「おこだま。急いでうしたんだじょえ?」

ちよ、だからその飲み物みたいな語尾やめろ。

「で？ クリスマスがどうしたんヨかまつたく……」

そして小娘。気付いてないと思ってるのか？

お前の中で『まつたく』がマイブームなのかよ。正直ウザいぞ。

「いいかエメリィーヌ」

「ウチはイカじゃないんヨ……まつたく」

「うるせえよ……つーかイカなんて言つてねえ……」

「山笠ビビった？ 流行りの威張りん坊将軍じょえ？」

おまえらびざえ！！

威張りん坊将軍って何だよ……暴れん坊将軍の親せきか何かかよ……

はあ、はあ……いつたん落ち着こう。ふう。

俺は落ち着きを取り戻し、静かに話し始めた。

「いいか？」

「だからイカじや『言わせねーよー』。『

落ち着き2秒で崩壊。

もつやだ……俺こは手に負えないよ……。

「最近流行りの手に負えないショウジョウだから言わせねえつってん
だろーー。』

寒いことなどすっかり忘れ、その場で立ち上ると同時に毛布をこ
たつに呪きつける俺。

もう少しうなつたら、すべてを無視して話を続けてやる。

俺は若干……とかなりメンディーので、無視しようと意気込んだのだ
った。

「よく聞け二人とも！ 実は今日、俺はある計画を企てていたのだ！」

なるべくカッコよさげに告げた。

「ある計画？ それはなんだじょえ」

「それはな、一日にわたるクリスマスパーティーだーー。」

そう、実は、これを計画したのは秋。
なんか、なんとなく思いついたらしい。

秋達の両親も、許可してくれているらしいしね。

集合は午後7：00となつとつます。なんとなく。
もちろん俺の家で。

まあ、そんな所だ。

だから俺は、秋が持ち出した企画を、さも俺が提案しました風に――人に話しているのだ。

「……山空。意味がわくあからんじようえ」

……………どこのなまつだよあんた。

「まあ、簡単に説明するどだな……」

俺は二人に趣旨を説明した。

要は、いつものメンバーで一日間盛り上がろうみたいな？

ちなみに、ヨギは家族と過ごすからバスだつてさ。せつたね。

もちろん、一泊二日だ。

سید رضا

突如才メガニ異変。

一
お
い
落
ち
着
け

「こ、琴音ちゃんも来るのか！？」

若干興奮状態のオメガ。
一応、来る予定だけど……。

.....来るかなあー?

もしかしたら変態が嫌で来ないかもしれないな。うん。

でも、基本的に盛り上がる事って、琴音大好きだからな。もしかしたら来るかも。

いや、でもやっぱり来ないかも。うーん。んー？ うーん。

……つまり。

「お前が必要以上に琴音に構わなければ来るんじゃね？」

「ヤツホオオオ！…！」

とても上機嫌ですな。

こたつの中から、オメガの喜びの叫び声が響く。
幸せな奴だな。

「カイ、クリスマスパーティってどんな事するんヨか？」

こたつの中から聞いてくるエメリィーヌ。

「えーと、みんなで集まって、遊んだり、騒いだりとかかな

「ゲームしたりテレビ見たりなんヨか？」

「やつやつ

「一緒に盛り上がったり？」

ג' נובמבר

「うーん、飯食べたり？」

「アーティスト」

それだけを告げると、急に無言になり始めるエメリィーヌ
そして数秒が経過し……

「どんな」飯なんヨか……？」

「そりや、パーティだからな。いつもよりは豪華にする予定だけど」

「……でも食べるん叶ね？」

「ちうだけど？」

「……ウチの食べる分が少なくなつてしまふんや」

お
い

みんなより飯かよ。

「安心しろ。なんたってバーで買いたからな。食べきれないほど買ってきたやるぞーー！」

「やつた――なんヨ――！――！」

喜びすがだぞあんた。

「んだけ食いしん坊やねん。……まあ、こたつの中のこるかのりばの
くらい喜んでるのか分からんが。

「どうあえずそんな訳だから、今から準備するぞ」

「俺はこたつの中に引きこもり隊の一人に告げた。

「なんヨー。」

「うむ

俺の言葉に元気良く返事を返してくれた一人。でもこたつから出て
こないのはなぜ?

こたつの事を思い出し、さつきまで気にしてなかつた腰をこより体
が震えた。

このままじや風邪引きやうだ。

「お、おこ。そろそろこたつから出でることよ

俺の声が震えている。

やばいなこれは。

俺が言うと、こたつがもぞもぞし始めた。

どうやら出て来てくれるようだ。

よかつた。これで凍死せずに済む。

……しおりへすると、こたつの中から何かが出てきた。

おいなぜだ。

なんで俺が呟いたのかと言いつと、出てきたのは一枚の紙。そこに書かれた『断る』の文字が目についた。

「こいつら……。

「ふざけんじやねええ！……」

まあ、そんなわけで、ほぼ無理やりこたつから引きずり出しました。

オメガはこたつの足に張り付きながらすり泣き、エメリィーヌはそれでもないようだった。

オメガキモい。

そのあとはいろいろと準備をしました。

部屋を飾り付け、豪華料理（特売の唐揚げ）を大量に買い、あと適当にパーティーに見えるものをかごに放り込んだ。

最初は嫌々だった二人（小娘と変態）も、今は一緒に手伝ってくれるはずもなく。
こたつから出た二人は嫌々ビンの騒ぎではなかつた。

自室に引きこもり始め、なんか知らんが軽いボイコット状態。

まあ、自室と言つても、結局は俺の部屋になる訳だが。

そんなこんなで、ほぼ一人で準備をした今日この頃。

すっかり時間は過ぎ、気がつけばもう午後6時30分を過ぎていた。

もうそろそろみんなが到着する時間だ。

え？ 展開早すぎで、適當すぎる？

大人になりなさい。特別編だからこれでいいのだ。

そして、すっかりおしゃれに飾り付けられた我が家リビング。

すっかりこたつで暖まっているオメガとエメリイース。

エメリイースは、クリスマスツリーの飾り付けの時のみ動いただけ。

まあ、そんな事はどうでもいい。

俺はこうこうイベント行事は大切にしたいのだ。

ほら、誕生日とか夏祭りとかさ。

他にも色々あるが、すべて盛り上げるのがこの俺。ただバカ騒ぎがしたいだけかもしれない。

でもそれでいいのだ。楽しければいいのだ。

バカみたいに騒いでないと、俺はただ疲れるだけだからな。ストレスの発散も兼ねて、これでいいのだ。問題無いのだ。

ほら、元祖天才バーボンに出て来るパパも言っていたじゃないか。
これでいいのだ。と。

つまりはそういうわけだ。

と、ひょいとその時だった。

「うわあー、凄いねー！」

突然、俺の背後から「うるはづのない少女の声が聞こえる。

つ・ま・り。

「琴音え！不法侵入は犯罪だぞ、ゴリラーー！」

後ろを振りむけば、そこには、『冬だよーもつ誰が何と言おつと冬なんだよー！』といったような、まさしく冬の格好をした琴音が立っていた。

手袋、マフラー、ニット帽。

耳あてはしていないらしく、耳と鼻。そして頬は真っ赤だ。

手には多少大きめな荷物。

そしてかすかに、帽子に白い何かが付着している。

「あれ？ 外、雪降つてんの？」

わざかに付着したそれは、『雪だよー。もう誰が何と言おうと雪なんだよー!』な感じだった。

俺の問いに、琴音が答える。

「うん。だから歩いてきたんだよ。自転車じゃ危ないし」

外はもう真っ暗だ。

そんな夜に、琴音が歩いてきた。

オメガやオメガ部類の人間がいたならば、高確率で誘拐しているだらう。

「おい、俺もいるんだぞ」

琴音の背後靈のようにつつすらと立ちつくしていたある一人の男が、頼んでもないのに突如喋り出した。

「ちよ、背後靈じゃねーから……実在してるから……」

まさかのトレーナーの上にパークーという、斬新かつ新鮮なファッショングをした一人の男。

だがしかし、意外なことにとても似合っているから困る。

そんな男の名は、竹田さん。

「ちよ、おい! 竹田さんはやめてくれよー!」

「え? お前竹田さんだろ?」

「やつだけど…やつじやないだろ…。」

…… しょうがねえな。

竹ちゃんが「チャ、チャうるわこし……。

それに、この小説を読むのは初めての方…つまり、初見の方々のためにも、かるく紹介でもしておいてあげよう。

では改めまして、まず『まわしへきー』の格好をしたこの少女が、皆さんおなじみ竹田 琴音^{たけだ ことね}。

とても元気な中学一年生。最近怖いよーの子。暴力的なんだよ。恐ろじや。

そしてこの存在感ない人が、琴音の兄貴にして絶賛影薄いキャラが定着中の竹田（以下略）。

「ちゅちゅちゅちゅ、ちゅっと待ていーー！」

何だよ。

「なんか不都合でもあつたか？」

「不都合あつたよーーてか、不都合しかねーーー。」

なんだと？ 不都合だらけですと？

「それは悪かつたな。不都合だけしかねえならわつと帰りなさい」

「違う……。」

「違うならそれでいいだろ」

「い、いや、違うけど違わないんだよー俺の名前が名前じゃない事に不都合であって、お前のもてなしに不都合が見つかったわけではないから、結果的に不都合ではないけども、お前の俺の扱いに不都合が感じられて、つまりは不都合だつたわけで……あ、あれ？」

なんか良く分からぬ事をよく分からぬ感じに咳いでいる、亡靈のように影が薄いこの男……あ、それじゃあ亡靈に失礼か。

まあ、とにかく。この男、理解不能なり。

「ひ、つまりはだな……その、あれだよーほら、そのそういう事だよー……」

「どういつ事だよ。情緒不安定があんた」

「ちがーよー！」

「じゃあ、精神不安定があんた」

「ちがーつー！」

「ならば、言語不安定か？」

「意味分からぬーよー！」

「つたく、だつたらお前はなんの不安定なんだよーーー！」

「なんでお前は俺を不安定にさせたいんだよーー。」

「わりこー、ちょっとなに言つてるか分かんねえやー。」

とうとう噴火した。秋が噴火した。

そう、この男の名は、竹田秋。琴音の兄貴。ただそれだけ。

そんな秋の頭の上にかすかに残った雪が、秋の存在感のようにすらと消えていった。

「海兄い、あまり秋兄いをからかうと壊れちゃうから」

琴音が静かに告げた。

壊れたら新しいの買ひから平氣だよ」

「……たく、安心しろ。冗談だよ」

これ以上からかうと本氣でぶつ壊れそうなので、とつあえずなだめておく。

「そうだね。竹田兄はおもちゃではなく、僕達の道具だからね」

「道具でもねええ！……」

突然オメガも参加。

そして秋をからかい続ける。

「そ、うか。竹田兄は道具じゃなく下僕だね」

「下僕でもねええ！！」

「なら奴隸ですな」

「奴隸でもねええ！！」

おい。そろそろやめたげて。
ちょっと可哀そうになつてきましたぞ。

だがやめないオメガ。

「なら、竹田兄はパシリで決定！！」

「なぜじやああ！……！」

そろそろ秋がいかれる。

琴音もそつ思つたのだらつ。少しムスッとした表情で、オメガに言った。

「恭兄い！そろそろやめなよ！……」

「琴音ちゃんの頼みでも、さすがにそれは聞けな『やめないと私だ

け帰るよー?』

「『』めんなさい』

「分かればよしつー。」

琴音の言葉を聞き、その場ですぐに土下座して謝ったオメガ。どんだけだよ。

しかし、琴音も琴音だ。

まさか力技ではなく、自らを武器に使ってくるとは。恐るべし女なり。

琴音つて意外と、将来付き合つたりとかしたら、さんざん遊ぶだけ遊んで、あとは捨てるみたいな人になるかも。
貢がせてポイッ。みたいな?

……やはり恐ろしい女なり。

「ちょ、海兄い、今なんか失礼な」と考えてたでしょ

「かかか、考えてないなり!」

「動搖しそぎだよ海兄い……」

また考えていたことが暴露されていたらしく、俺は驚いて語尾がかしくなってしまった。

俺はいつもそうだ。

無意識のうちに考え事を自ら暴露していく。

そして、さらに最悪なのが、喋らないように意識していると、今度は表情に表れてしまう事だ。

つまり、俺の考えは、世間様にフルタイムオープン状態。まるで無料で入れる博物館のように、いつでもどこでも思考公開しているのだ。

これを逃れるには、この俺が感情を持たない植物人間と化すしかない。

それか、みんなに耳栓&アイマスクを常時装備してもらいつとか。

表情で分からぬようにセロハンテープを顔中にべたべた貼りつけて、バカみたいなツラを民衆の前にさらけ出すしかない。

もちろん、そんなこと出来るはずもなく。

つまり、諦めるしかないのだ。そうなのだ。これでいいのだ。

とあるパパさんも言つていた。これでいいのだ。と。

そんな考え方をしていた俺に、琴音はめっちゃ呆れ顔だ。やめて。

「……そんな所で話していないで、こたつに入つたらどうなんヨか…？」

そしてエメリィーヌも、呆れた声で俺たち三人に言つた。

ずれた俺たちの話の流れを断ち切り、まともな方向へと持つて行つ

てくれるのがエメリイースだ。

あ、ちなみに、エメリイースは宇宙人らしい。見た目はとても美少女だけどな。中身はただの生意気な小娘だ。以上。エメリイースの紹介終了。

……言い忘れていたが、エメリイースもまた冬仕様。

地味な灰色のトレーナーを着て、薄緑色の若干もこもこしたズボンをはいている。暖かそうだ。

こんな地味な服装でも、オメガの手にかかるばこんなにも可愛く着こなせるのだ。

まあ、エメリイースだからこそだとは思うが。

そして、なぜか白いマフラーを頭に巻いている。
仕事疲れの、酔っぱらったサラリーマンが頭にネクタイを巻くかの如く。

聞く所によれば、本人 ^{いわ}曰く、強くなつた気がするらしい。
子供の感性……いや、宇宙人の考えることあ分からん。理解に苦しむ。

そしてこの変態。もといオメガの紹介に入ろう。

オメガは、俺が付けたあだ名。カツコよく言えばニックネームだ。外見はとてもイケメンで、俗にいう美少年そのものだが。

綺麗な薔薇にはとげがあるといつよつて、イケメンの姿は仮の姿。本当の姿は別にある。

このイケメンの容姿に騙されて、何人こいつの犠牲になつたか分か

らないほど！－

「イツは全少女たちの敵なのだ－！」

と、なんかゲームの魔王っぽい説明になつてしまつたが、それもしそうがないこと。

……え？ 魔王の説明っぽくなつてないって？ うるせえな。細かいこと気にするなよ。

で、続けると。

なぜなら奴は……超ド変態だからだ－－！

そつ、ロリコンで変態でメガネでオタクで銀髪で……あ、オメガの由来はオタクメガネからきている。

そんなオメガは、俺や秋と同じ高校二年だ。

少女達を見るとバカみたいにアホになり、バカみたいな事をアホみたいにやる。それがオメガ。

先ほどの流れで分かつたと思うが、琴音もオメガの標的となつている。

そんなオメガの服装は、中央付近の大きくて赤いハートマークの中に、白字で『LOVE』と刺繡ししゅうされたピンク色のトレーナーを着ている。

一緒に街を歩きたくない格好ナンバー1のような格好だが、不思議と違和感もなく、とても似合っているのだから困る。

多分、この服を考案したデザイナーさんでも、ここまで綺麗に着こなしてくれるつわものが現れることなど、頭の片隅にもなかつたであろ？。

これが変態の底力だ。

……え？ 僕の格好？

安心しろ。ただの革ジャンだ。気にするな。

「Hメリイちゃん。隣座るよ？」

「別にいいんだ」

「琴音ちりん！ 駆け落ちしない？」

「する訳ないでしょ。崖から落ちる」

そんな会話には、すっかり慣れてしまった俺達。琴音も慣れちゃってるツボイし。慣れって怖い。

俺はみんなの前に、毎回大量に買った豪華料理（特売の唐揚げ）や、その他もうむりを出す。

それを見たエメリイーヌが一言。

「つまーーなんじゃーつやーーー。」

大変興奮気味の「」様子。子供は無邪氣で可愛いものだ。

そして、琴音も一言。

「海兄に、お皿に盛りつけ出すとか考えなかつたの……？」

うん。素直でよろしい。

そうなのだ。実は、よくスーパーなどで見かけるあれ。白のプラスチックのトレーに、特売のシールがでかく貼られているのだ。

そりや、雰囲気もくそもあつたもんじやないわな。俺が悪かつた。

琴音に言われて初めて気付き、俺は大きめの平たい皿を持ってきた。そして、豪快にすべての唐揚げをぶちまける。そう、皿の場外へ。別にワザとではない。ほら、あれだよ。些細なミス。

「ちょ、海！お前バカか！－何やつてるんだよーこのバカ！」

秋が驚いて俺に罵声を浴びせる。素直でよろしい。

さうして、一つの皿に盛り過ぎたらしくてつぺん付近の空揚げがこれまた見事にぐるぐると場外へ。

こうして、約10個の唐揚げが地面に散らばった状態となつた。……えへつー！ミスつた

「……って、そんなんくだらない事していい場合じゃねえ！－」

俺は自分で自分にツツコミを入れるとほぼ同時に、豪快に『3秒ルール！－』と叫びながら、皿の上の唐揚げらにハブられた唐揚げ達を素早く拾い上げる。安心しゆ。箸でやつている。

皿を台所へ取りに行き、その皿片手に落ちた唐揚げ達を一つずつ箸で救出する。

焦っていたためか、何個ほどか取るのに苦戦したが、何とか終了。

救出の終わった唐揚げ達をテーブルに並べて、この俺の『30秒間の3秒ルール』は幕を閉じた。

「ふうー。あぶねえ！ セーフ」

俺がそう呟くと、さすがは竹田兄妹。一人仲良くなっただけやがった。

「アウトだよー！ ーーー！」

「アウトだよー！ ーーー！」

声で分かる通り、上が琴音で下が秋。一人仲良くハモりやがったわけだ。

「何だよお前ら。どのへんがアウトなんだよー！」

俺は逆切れをかます。

そんな俺の言葉に、最初に言い返してきたのは琴音だった。

「全部だよー！ もう全部アウトだよー！ せめて洗って来てよー！」

「いや、それはダメだろ。泡だらけになる」

「なんで洗剤で洗つ」と云なったのー？ 普通水でしょー？ 水ですぐでしょー？」

「いや、それはダメだ」

「なんですよー?」

「だつてよ。そんな」としたら、すすいだ瞬間、唐揚げの衣がキュキコッと落ちてしまつ

「そんなもん加減しなよー!」

……とてもあらがふる琴音。

正直、こんな琴音を見るのは初めて……ではないな。うん

「おー! 海。お前ふざけるのやめろよ。早くなんか食わせりよ」

食欲にまみれた琴音の兄貴。

そして、食し始めた縁の小姑娘。

「おー! メリィース。今日はフライング禁止だ。先に食うとじゅない

「ちっ、ばれたんヨか」

バレバレだ。

両の手に握りしめた唐揚げでバレバレだ。

「海、早く洗つてこよ。そして食わせりー!」

秋は本気で空腹のようだ。しじみがない。早めに準備するか。
そして。

「竹田兄の……モグモグッ……」おつとおりだよ、「クン。山空……モグッ」

「おいそこのハゲメガネ。お前何堂々と食つてんだよ！」

しかもメチャクチャ分かりやすかつたぞ。
モグモグッゴクン。とか。隠す気ねえだろ。

「山空……モグモグ……僕はメガネだが……モグ……ハゲてはいない……ゴクンッ。のだよ！」

「のだよ! じやねえよ。ちよつとぐらい待てよ。すぐ用意するよ。」

……なら早く用意しなさい。あと3個食べたらさあめるから

まだ食う氣かよ
空氣の秋が泣いちやうぞ

「誰が空気だよーーー！」

「お前だよ」

「俺かよ！！」

「そりだよ」

「やうがよ...」

もう少しひの意味が分からん。

とりあえずそんなわけで、俺達の豪華な夕食は終わったわけだ。

夕食が終わり、みんなはそれぞれ戻り始めた。

秋は相変わらずエメリィーヌと遊んでるし、オメガも相変わらず琴音にべったりだ。いや、実際にはべったりではなく、ボッコボコだが。

琴音も琴音で、結構楽しそうだし。

そしてなんとなくみんな忘れていいと思うが、今日、琴音達は俺の家に泊るのだ。

ちゃんと、荷物も持つて来たみたいだしね。

……果たして、無事に歸つた事は出来るのか。（特に琴音が）。

そして、無事クリスマスを迎える事が出来るのか。今日はほり、クリスマスイブだから。

さらには、夕飯の豪華な材料や、エメリィーヌのクリスマスプレゼントを買つたせいで、俺の財布は悲しいことに。

……違う。俺が買つたんじゃない。サンタさんが買つたのだ。

そう、サンタさん。絶対にサンタさんなのだ。良い子のみんな！サンタさんだからなー！

その時だった。

「カイ、ところでクリスマスってなんなんヨか？」

.....え？

「今何と？」

「だから、クリスマスってなんなん玉かって……」

ええええええええ！？

あれだけ盛り上がっておいてそれは無いだろー！？

……そんなわけで、エメリィースの衝撃発言が、午後8時27分49秒頃。この俺に降りかかるつてきた。

そう、クリスマスイブの夜に

クリスマス特別編！（前編） 終

俺曰くクリスマス特別編！（前編）～クリスマスイブの夜～（後書き）

後半へ続きます！！

俺曰くクリスマス特別編！（後編）～メリークリスマス～（前書き）

皆さん！～メリークリスマス～！

俺曰く！クリスマス特別編！（後編）～メリークリスマス～

「クリスマスってなんなんヨか？」

クリスマスイブの夜。

それも、さんざんパーティーやらをした後のことだった。

まあ、前編を読んでくれた方ならもうお分かりだろ？

だから説明は省く！……訳にもいかないので、前回のあらすじをかいつまんで説明しよう。

まず、竹田兄妹とエメリィーヌ、そしてオメガ。

そして俺を合わせた五人で、クリスマスパーティーをしたわけだ。

そんでもって、地味に初となる竹田兄妹の宿泊。もちろん、俺の家に。

……本編を見てくれている方なら誰だか分かると思うが、白河雪。
通称、ユキと呼ばれる、高一の奴がいるんだよ。もちろん女性だ。
そいつは家族と過ごすがために今回は不参加だ。

まあ、そんなわけで、楽しい豪華夕食が終わった俺たちは、特にやる事もなくいつものようにグダっていたわけなんだが……なんと。

そう、朝から今までずっとと一緒にいたと言つのに。
一緒にパーティだとか言つて騒いでいたのに。

エメリイーヌという小娘が、クリスマスを知らなかつたといつ衝撃の事実が発覚したわけだ。

それが、イブの夜。それも、約、午後8時30分頃のことだった。

俺曰くクリスマス特別編！！（後編）

～メリークリスマス！！～

「だから、クリスマスってなんなん三かつて……」

あどけない顔した少女の口から、驚きの言葉が飛び出した。

まあ、しょうがないので、この俺様が、見事に説明してしんぜよ。

俺はカツ「こい顔つきを頭の中で何パターンか作り出し、その中で教える時にしていると一番カツ「良きそうな顔つきをチョイス。

俺がチョイスした顔つきは、目元はキリッと。眉もキリッと。口もキリッと。

とにかくセレブリティキリッさせ、クールな教師的な設定の顔を作り出した。

その顔を表に出し、これ説明へ！

「エメリイーヌちゃん。クリスマスっていうのはね……」

「お前が教えて差し上げるのかい！？」

突然の琴音の割り込みに、クールな教師顔でツツ「ミを入れてしまつた。

つまり、変な顔してツツ「ミを入れる人になつてしまつたわけだ。
アホらし。

「24日。つまり今日だね。その夜中に、年中同じ服着たファッショ
ンセンスのかけらもないおじさんが……」

おい。

「トナカイを調教して、こき使ってソリを引かせ……」

おいおい。

「白いひげを生やしているが、実は付けひげで……」

おいおいおい。

「カギ穴を無理矢理こじ開け、家に侵入して寝ている子供たちの枕
元に立ち、怪しい微笑みと共に見降ろしてきて……」

おいおいおいおい。

「手に持った薄汚れた袋の中から、ラッピングされたプレゼントを、
なぜかみんなの望んでいる物をピタリと当てるおじといいくんだよ！

！」

ちよ、琴音。お前……琴音……。

「なんなん曰かその怪しい人物は！大体、姿を見せず、その子供たちの欲しい物だけを置いていくなんて……悪徳業者みたいなやつなん曰ー！」

馬鹿野郎。サンタをなめんな。

あのおじさんをなめるんじゃねえよ。

サンタクロースはな。

みんなのお父さんなんだよ。

お父さんが、一年間汗水たらして頑張って仕事して、苦労してためたお金で、可愛い息子、娘たちに優しく微笑みかけながら枕元にそつと置いてるんだよ。

なのにあのサンタときたら。

その場にいなーどいるか、存在すらしないただのメタボジジイのくせに……

感謝されるのはお父さんではなく、不摂生でメタボってるただの白ひげジジイのお前なんだぞくそサンタぬ。

お父さんたちの気持ち考えたことあんのかよ。

かの有名な赤い帽子をかぶり姫様を救出に向かつあの鼻でかのマオのように絶大な人気物になりやがつて。

なんなんだよ。

赤いのがそんなにいいのかよ。

赤いからなんだってんだよ。ザケんじやねえぞ。

全国のお父さん。

今がチャンスだ。一緒にたたみかけよつぜ。

こんな悪行の限りを尽くしたサンタなんかに、俺たちの苦労の末の幸せが取られてもいいのか？ そう、良いわけがない。

……え！？ 子供たちの喜ぶ顔が見れるなら、このままでもいいだつて！？

くそっ、泣かせるじゃねえか。

流石はお父さん。

通った修羅場の数が違うつてわけか。

くつ、俺には到底……かないそもそもねえや。

「おい海。お前大丈夫か？ 休んでた方が良いぞ？」俺たちの事は気にするなよ

本気で心配そうな顔をしている秋。

……ああ、秋。お前は優し奴だな。

だがな。その優しさが、一番辛い時つてあるんだぜ。今がその時だ

ああ！？

「変な心配してんじゃねえよ！…俺はまともだつ！…ぶつ飛ばすぞお前！！」

「はあ！？ 海こそなんだよ！…ボーッと突つ立つてたから俺は…」

「海兄に。秋兄に。けよつといつるやこよ」

「……」

「……」

あれ、なんでだろう。

別に琴音怒つてないよな。

何で言つ事を聞いてしまったんだよ俺。

別に琴音はうるさこから静かにして。つてお願いしただけだぞ？

なのになんで、黙つてしまつたんだ？

「海……。お前もとつといつその症状があらわれてしまつたのか……」

秋がポツコヒづぶやく。

「どういふ意味だよ？」

「琴音とこるとな……なぜか逆らえないんだよ。多分体が恐怖して
るんだろうな。俺達を守るために、俺たちの体が逆らつてるんだと
思つ」

「…………深いな」

そつか。俺は今、自分に守られていたのか。

ありがとう。俺の体。これからもよろしくな。俺の体。

……あ、やうだ。

「琴音ーお前、風呂に入るだら?」

俺はある事に気付き、琴音に聞いた。
けしてやましい気持ちで聞いたわけではない。

「え? あ、その……うん」

少しだけ赤くなつたが、どうやら入るらしい。
何度も言つが、けしてやましい気持ちがあつて聞いたわけではない。

「…………琴音、ちよつと一緒に風呂場にこへ」

何度も言つた。けしてやましい気持ちで言つていい訳ではない。

「なんだよ海。お前何考えてんだよ?」

やましい事は考えていないのは確かだ。

「あ、そつだ、Hメリイースも一緒に来てくれ」

「なんなん!?か?」

「海兄い、……もしかして変態だつた……ああー変態……やうに、
意味か!…」

琴音も言いかけて気付いたっぽい。

そう、変態なのだ。

いや違う。俺が変態なわけではない。

変態と言つ単語に意味があるのだ。

そり、もひ察しの良い皆さんならお気づきのことだろ？

後編に入つてから、変態。そり、オメガが一言も喋つていないので
!!

てか、せつから姿が見えない。これはもう、あれしかないだろ？

「なるほどな。盗撮か」

秋も氣付いたらしい。

そうなのだ。防水小型カメラなんか設置された日には、大変な事になるのは目に見えている。

……つーか女子に、それも中一の女の子が変態で連想するのが才メガつてどうよ。

よほど変態の印象が強いんだろうな。普通変態でしょっしうう一緒にいる人を思い出すってなかなか無いぞ。

ある意味凄いなあいつ。

「まあ、そんなわけだから、浴室行くぞーーー。」

「うん…」

「任せろなんヨ…」

まあそんなわけでだな。浴室についてみたものの。

カメラどころかオメガの姿もない。

でも油断はできないって事で、こっそりとエメリィーヌにオメガの思考を読んでもらったわけだ。もちろん、久々登場だが超能力で。すると、オメガは琴音の寝る予定の部屋にいる事が判明。ついでに、浴室に巧妙に隠された隠しカメラ、計8台を取り除くことが完了した。

つーか、もうあちこちにカメラがある。

廊下にトイレにリビングに。一階に階段にすべての部屋に。

結構時間がかかったが、すべてを取り除くことが完了。

浴室のも合わせて計47台。盗撮のプロかオメガは。

そして、エメリィーヌは超能力を長時間使い過ぎた為に、ソファでぶつ倒れてい。

よく頑張ったな。エメリィーヌ。変態の思考を読ませてすまなかつた。

気付けば時計は9時半を回っていた。

俺はすぐさまオメガを捕獲し、ロープで縛つてこたつの中へ拉致監禁。

俺と秋でオメガを見張っている間に、琴音とエメリィーヌは無事入浴完了。

エメリィーヌは、10分程度でよくなつたんだよ。

まあ、そんなわけで。

俺たちも順番に終わらせ（琴音に言われたので、俺と秋はシャワーだ）、オメガは縛つたまま浴槽へと放り投げてくれた。

だがオメガは琴音ちゃんが入つた残り湯だー！と、クリスマスなのにも拘らず変態な発言をして喜んでいた。

だが、琴音もそななる事は分かつていたらしく、自分はシャワーで済ませ、まさかの入浴剤だけ入れて、いかにも『私が入つた残り湯だよ！』を演出。だがもちろん、当の本人は風呂には浸からなかつたという偉業を成し遂げた。

でもオメガはそんな事など知らず、愉快に喜んでいた。

風呂の湯を飲み始めようとした時はさすがに引いたが、琴音の一撃で溺死体のようになったので良しとしよつ。

で、その上から見事に浴槽にふたをした琴音は、浴室の灯りを消して、就寝に至つた。

流石のオメガも死ぬんじゃないとか心配になつたが、心配になつただけで、俺も寝る事にした。

ちなみに、琴音とエメリィーヌは同じベットで寝た。つまり俺の部屋だな。

で、秋もなんか怖いからという理由で、俺の部屋で寝た。

俺は寝る所がなくなつたので、仕方なくリビングのソファへ。

結果を告げると、オメガは変態だつたという事。

そして、無駄に入浴剤を使われたことに俺は軽くへこんでいた。

しばらくしたのち、エメリィーヌの枕元にプレゼントを放り投げ、眠りについた。

『なんか凄い手を抜いた感がぬぐえないが、きつちり書いているとクリスマスの特別編なのに現実世界でクリスマスが終わってしまうので仕方がない』と作者が呟いていた。

んで、次の日。つまりクリスマス。

前編はクリスマスイブの話だから、

後編は、クリスマスの話をお楽しみいただこう。

では、始まり始まり。……気にせず行こうぜ。

朝。

カーテンの隙間から、朝日が差し込んできた。

その朝日によつて、俺は目が覚めた……方が、なんか神秘的で良かつたのにね。

現実は残酷だ。

まず起きて第一の感想を述べると、尋常じゃなく寒い。
その寒さによつて、俺は勢いよく飛び起きた。……が。柔らかいな
にかが顔に覆いかぶさる。

そして第二に、目の前が真っ赤だ。

正確には赤い何かが俺の視界をうばっている。

赤く、柔らかくて毛糸のような肌触り。
かすかに温かく、呼吸と共に小さく揺れている。

……呼吸！？

俺が理解する前に、『ボコッ』という効果音と共に俺の顔面に激し
痛みが。

そしてソファにいたはずの俺は、気付けば床に転がっていた。

そして、顔面。特に鼻に、熱くて鈍い痛みがじわじわと。

なにが起きたのか理解できず、俺はただ鼻を押さえながら起き上がる。

「ふと田の前にな……可愛いサンタ。

「……いきなりにするんですか」「みん先輩……」

聞き覚えのある声。

そして何より、特徴的な俺のあだ名。

そう、ついみんとかぶせた名前で呼ぶのはあこひしかいな。

「コキ!? お前なんで」「……てかなんで俺がこんな田……」

皆とも分かっているとは思つが、俺は多分殴られた。

そして、俺を殴ったやつが、このコキという女だ。

「先輩が悪いんです……コキはただ寒そうな先輩を見て布団をかけてあげようと思つただけですのに……その、ほり、なんでもあります……！」

顔を真っ赤に染め、そのまま向いてしまったコキ。

そりゃりコキは、寒さで震えていた俺に毛布をかけようとしてくれてたりしない。

そこで俺が勢いよく起き上がってしまったがために……。コキの
……その……控えめな……つん。

俺は気が付いた。

そりゃ殴られて当然だわ。うん。

「あ、そのーあれは事故でーーえと、…………その「めん」…

多分、俺は顔が真っ赤になつてゐると思ひ。

だけど仕方がないだろ。俺は事故だ。

「わ、分かってますですーーユキもその……いきなりで驚いて殴つたりしてすみませんでしたです」

「お、おひ」

とりあえず、クリスマスの朝は刺激的なる朝だった。

……え? よく意味が分からないつて?

そんなこと言わないでくれよ……俺にだつてその、表現の限界といふものがあるのだ。

つまり、その、ほら。

ユキの……そのほら、あれだよ。その……控えめな胸元に顔がだな…

…つて、なんだこれ!!

もう良いだろーーどんなバッゲームやなん!!

もう勝手に理解してくれよーー恥ずかしそぎて死ぬわーー!

…………ほんつ。今のは忘れてくれ。

つまり、高校入ってから、今年の夏まで琴音以外の女子と会話をした事が無かつた俺にとって、まあ、あれだ。

女子といつモノに免疫があまり無くってだな。

先ほどのように、通常ならハーレムたる出来事も、今の俺にはただ恥ずいだけなのだ。

純情系男子だ。

って、俺の事はどうでもいい！

やつ、気になる事がある。

「ゴキ……なんでサンタの格好してるんだよ」

そう、サンタの格好だ。
誰が見ようとサンタ。

ひげは付けてないけどな。ひげ以外はサンタ。うん。

ついでに言つておくと、不法侵入している事にはもうノーリタッチで行くから。

「ほえ？ だつてクリスマスじゃないですか。それに可愛いですよ
？ この衣装」

そう言つとゴキは、サンタの格好を俺に見せつけるよつて、ゆっくりとその場で回つて見せた。
あ、でんぐり返しとか、前転とかじやねえよつて

ちなみに、長そでズボンなので寒くはなれ。

そしてわざと今氣付いたんだが。

「ユキ、お前髪型どうした？ イメチョン？」

いつもは後ろで一つに結っているが、今はそんな事もなく。裕に向うストレートロングみたいな感じになつてゐる。

髪型一つで、雰囲気って結構変わるものだ。

「あ、学校の時以外は、基本結つてませんです」

「え？ でもこの前の休日は……」

「偶然です」

「あ、そつなんだ」

「うわせり、うわせり」といじつて。

ちなみに、今ア時ちよつと前。

「ふふふ。どうですか？ 新しいユキはどうですか？ 惣れ直しちやつたりしましたですかー？」

顔がニヤけてますよユキさん。

「確かに可愛いケドだな」

「本当にですかー!?

「でも惚れ直しちゃつたりしない

「うう……ショックです」

がくーんと、落ち込みましたアピールをしていく。

なぜがつかりするんだ。やめてくれ。

そしてこれを読んでる読者様にいい事を教えてあげよ。……むつ
ちや寒いやん。

そんなわけで、とりあえずこいつに入った俺とユキ。

流石に一人きりじゃ話が盛り上がりんな。

そんなわけで、俺はユキに疑問をぶつけてみる。

まず第一。

「家族と過ごすんじゃなかつたのか?」

ユキは家族と過ごすからバスだと言っていたのにも拘らず、今現在
ここにいる謎。これを解明しよう。

「そうですが……色々あつて先輩に会いたくなつたので来ましたー!

「!」

どうやら、色々あつたらしい。
これ以上追及するのはよそう。

そして第一」。

「お前……なにしに来たの？」

「だからひーみん先輩に会いたくて……正直、こいつの方が楽しそうな気がして」

本音は俺たちといた方が楽しいからだとさ。
……ユキの家庭って複雑なの？

まあ、これ以上追求するのはよそう。

……また暇になつたな。

と、その時だつた。

「ほわあ！－！な、なんですかあの人！？」

ユキが突然大声をあげる。つーか、ほわあって驚く奴初めて見たわ。

ユキの指差した方向を見てみると……。

「うへえ！？ 誰だお前！－！」

人間は驚くと変な声が出るらしいな。

つて、それよりもこいつ誰！？

そう、俺とユキが見たものは。

全身ズブ濡れで、縄で縛られていて、メガネで銀髪で。

だがおかしいのはその顔だ。皮膚が、まるで硫酸をかけられたかの如く溶けだし、剥がれ落ちようとしている。つまり、顔面ぐつちゃぐちや。

ぐちやぐちや度でいえば、プリンをフォークで潰しまくった時のプリンのよじつけつけられちゃだ。

「や、山崎……」

そんなモンスターが、俺の名を呟いた。

つーか、オメガだよな？

声はオメガだ。でも顔はぐちやぐちやだ。

その時、一階から足音が。
どうやら、誰か起きてきたようだ。

そして、リビングへと入ってきた。

「海兄い、なに大声出してるの……？」

琴音である。

寝起きゆえ、寝癖で髪が跳ねている。

いつも結っている髪も、今は結ってはいない。……まあ、琴音は見なれてるから、コキの時のような不思議な違和感はない。

そして、オメガの顔を琴音が見た。

「……」

琴音は、まだ寝ぼけているのか、じばらくモンスターと化した恭平の顔をじっくり眺めている。

つーか本当に何があつたんだ。大丈夫かよオメガ。

俺の心配をよそに、オメガを見つめ続ける琴音。

それから、しばらく……。

「…………うわあ！？恭兄い、なんでそんなズブ濡れ！？」

おい。もっとおかしい所があるだろうが。

顔にじり注目しろよ。

絶対に顔だろ。あのイケフェイスがぐつちやべつちやのドシロドロなんだぞ。

その時だった。

なんの足音もなく、なんの気配も感じられなかつたのに。
ある一人の存在感が薄い奴が。

「どうしたんだよ……ついで、恭平！？なんでもまだ縛られてるんだよ
お前」

秋も見事に顔はスルーだ。

「うわあああー!?

そんな秋に驚く琴音。

なんでオメガの時より驚いてんだよ。

つーかお前ら!…ずぶ濡れより縄より、もひとつ立つ所があるだろ
!!

顔だよ顔!!

お前り何だよ!!

そしてまた、二階から足音が。エメリィーヌが来た。

「カイ、なに騒いでるん四か?」

とても寝起きが良いエメリィーヌ。

その手にはきちんと、俺が夜中に置いたプレゼントを握りしめてい
る。

あれ? もうちょっと驚いたりとかしてくれてもよくな?

こちとら、反応だけが楽しみで……反応!

そうそう、エメリィーヌ!…お前、この間抜け兄妹にちゃんとした
反応を見せてやってくれ!!

行け!お前ならオメガの顔に気付くはずだ!!

俺は必死でエメリイーヌを応援した。そして。

「……あ、キヨウヘイなんとか。おはよつなんヨー。」

「おはよツメール」

まさかのあいさつ。

朝の挨拶がキチッと出来て、誠によろしいのだがね。

残念ながら、今は違う反応が欲しかったわけよ。

つーか、オメガもその顔で爽やかに朝の挨拶かわしてんじゃねえよ。

「せ、せせ、先輩！ 眼鏡先輩！－－ ビビ、ビうじたんですかその顔！？」

俺の隣で、ユキが俺の待ち望んでいたツツコミを入れた。

待望のツツコミだった。

俺はこれを待つた。

正直、俺の目がおかしいのかと疑いかけていた所だった。

ありがとうユキ。俺はお前のそのツツコミを、しばらく忘れないだ
う。

「あ、ほんとだ……恭兄いぢうじたの」

「俺も気付かなかつたわ。恭平どうした？」

「 えへしたん丌か？」

コキの言葉で、やつとみんなが氣付いたようだつた。
お前らの視野狭すぎだろ。

みんなに心配され、やつとオメガが話し始める。

「 」の顔は……」

オメガの言葉の雰囲氣に、その場が一気に静かになる。

そして、みんなが息をのむ。

その状況の中、オメガが呟いた。

「 一 日中泳いでたらふやけた」

ほう。なるほど。わからん。

「 ふ、ふやけたあ！？ なにバカな」と言ひてゐるんだよ……そんなわ
けねーだろ！！」

秋がツツ「 む。

そう、オメガの顔は、もうリアルでやばい。

直視できないほどがあり様だ。

顔に蟻でも這わせてみる。一瞬にして砂場に見えるぜ、やつと。

「 恭兄い、もしかして寝ないでずっとお風呂の中にいたの……？」

琴音が、恐る恐る尋ねた。

「そりだよー。琴音ちゃんの残り湯を堪能していたのさーーー。」

まだ騙されてるよ」イツ。

「あ、はは。恭兄い、よかつたね……」

「うんー。」

さすがの琴音も、種明かしするのが可哀そうになつたのだろう。
メチャクチャ苦笑いだけどな。

「うーーみん先輩、眼鏡先輩大丈夫なんですか……？」

ユキが小声で聞いてきた。

確かに、あの顔絶対におかしい。心配だよな。

「いえ、そうでなくてですね……変な人すぎません?」

「あ、そっちね。大丈夫大丈夫。あいつはいつも変だから」

「……ユキは人の人ちよつと苦手です……怖いし」

「ユキはちよつと怯えているようだつた。

確かに怖いな。変態だものな。

「キョウヘイ。顔が取れかかってるん^ヨが……」

エメリィースがやつとまともな質問へ。

そうだ。早くこの問題を解決せねば。

「こんな変態の顔面^ヨ」ときで、小説の文字数を増やしてはいられん。
ちやつちやと行くぞ。ちやつちやと。

ツツコミ所があつても、すべてを無視してすすめるからな。文句は
受け付けん。

「あ、これが。これは大丈夫。なんたつてマスクだからねーーー。」

ツツコミ所その1。なぜかマスク。

「なんだ。マスクだつたんだ。なら早く取りなよ

「うん分かったよ琴音ちゃん。……ぐつ、うつ、うおおおおーーー。
！—シヤキーン」

ツツコミ所その2。謎の雄たけび。

ツツコミ所その3。謎の効果音。

「あ、マスクが取れて元の恭平に戻つたん^ヨ」

ツツコミ所その4。縄で縛られていて両手が使用不可のはずなのに
マスク取れちゃつた。

「あ、見られてしまった。琴音ちゃん。僕の素顔を見てしまった人

には、生涯責任を取らせよと言われているのだ。結婚しようつむ

「お断りつ！－！」

「グホオツ」

ツツコミ所その5。謎設定。
ツツコミ所その6。琴音怖い。

ほつとく所その1。秋空氣。

「！」、琴音ちゃん。いつも以上に、激しいじゃないか……ガクツ

「つーみん先輩。何ボーッとしてるんですか？」

俺の方をユキが揺らしてきた。

おお、終わったか。

ツツコミ所カウンター機能停止。よし。

「おじみんな！外を見よ！－！」

俺は勢いよくリビングのカーテンを開く。

するとそこには、庭一面に降り積もった雪。

まさしくホワイトクリスマスだ！－！

ホワクリだ！－！ホワクリホワクリ！－！ん？ フォアグラフ？ つて、
なに考えてんだよ俺。

「おー……すげー積もってんじゃんか……」

やつと秋が喋りはじめた。

お前の感想など聞きたくない。

琴音やエメリイース。コキなど、女子の感想を求めているのだ。小説的に。

「ま、真っ白やー待歩く少女たちのし『恭兄に。つるわこよ』

「琴音ちゃん！悔しかつたら止めてみグフオーー！」

容赦なく神の鉄槌をくだす琴音。

オメガもオメガだ。よくやるよ……ホント。

ついか、お前らいこノンビだな。

そんな事より雪だ。

こんなにも積もる事なんて珍しいからな。

琴音やエメリイースも大興奮間違いなしだうつーと、思つてたのが約3秒前の俺。

だが現実は甘くなかった。

「つー、ビーリで寒いと思つたよ。じたつじたつ」

.....琴音エ . . .

「ウチも寒いのは嫌いなんπ……」たつたつ

……ハメリィース……。

くわ、たるんじるーー！

最近のわけえもんは根性とこつものを知らんーー！

よつて、この江戸改革の新生児と呼ばれたこの俺直々に指導しちゃ
るーーー！

「江戸改革つて……お前今いくつだよ」

「ふつ、見た田じおつせ……」

「あつそ……」

なんだよ秋。その田はいつたい何だよ。

いいだろ。俺だつて何か名称が欲しかったんだよ。

ほら、秋だつて色々あるじやん。

生ける屍とか、落ち武者「ゴロ太」とか。

「ねーよーーそんな嫌な名称ねーよーーてか、ゴロ太つて別人やん
！ーー！」

「はあー？なに言つてるんだよお前。ゴロ太なめんじやねえぞーー？」

そう、ゴロ太は中肉中背で、うす味を好み、愛と勇気と正義を置いてきた奴らが健康を貫くために戦うRPG。

「ゲームかよ！…しかもありそうで嫌だなおい…！」

いや、そんなゲームないだろ。どないなゲームやねん。

「秋先輩！…雪ですよ雪！…秋先輩を突き落としてもいいですか？！」

「よかねーよ！…なにがどうなつて俺が突き飛ばされなきゃならんのだよ！…」

「突き飛ばすんじゃないですよ。突き落とすんです」

「大差ねーべ！…？」

「え、大佐命令？ なに言つてるんですか？」

「なんで聞き間違えた！…何がどうなつて大佐命令になつた！…とか大佐つてだれさ！…？」

「大佐は大佐ですよ。もしや秋先輩つて、テストの点数悪い人ですね？」

「大佐なんてテストで出てこねーよ…！」

「なに言つてるの秋兄い。ペトラ大佐はテストに出て来るでしょ？」

「え？ そんな大佐いたか？」

「いの訳ないでしょ」

「いねーのかよ……唐突に変な嘘つくなよ……」

秋とユキと琴音がミーハンヒトモニ事してゐる。

クリスマスなのにね。なんだらか、このへんな感じは。

なんで雪がこんなに積もつてゐるのに遊ばないんだらか。

雪で遊ぼうぜ？

みんなでさ。雪で遊ぼうぜよ。

雪玉とか持つてあそぼうぜ？ 平和にさ。

「みんなでユキを弄^むふん^あうか？」

「それ誰かが言つと思つたわ。つーか、その言に方やめり

意味を間違えれば卑猥なことになる。聞く人によつちやあつぬ誤解
が生まれそうだ。

「そういえば、Hメリイース。お前雪は初めてか？」

「ん？ ユキなんよか？」

「違う。外の雪」

何回同じネタをやらせるんだよ。

「それは当然にして偶然。出来過ぎた奇跡といひ言葉。だが奇跡は起きるものではない。起^レす物なのだ」

「無駄にカツコよく言つてんじゃねえよ」

とにかく、雪初体験ならば遊び方もしらんだろ？。色々遊び方つてもんがあるんだよ。

これで、ハメリイー又をホワイトのサボミ込んでやる事!!

つて、それじゃ生き埋めじゃねえか。

まあ、なんとなく気合が伝わればよしとしよう。

「じゃあみんな！外で遊ぶぞーーおおおーーー！」

俺は元気よく皆に告げた。

「カイ、その前にクリスマスケーキを食べるん?」

……ハメリイーヌめ。なぜクリスマスは知らんくせにそんな事は知つてゐるんだよ。

「あ、ごめん。私が寝る前に教えちゃった！」

確信犯は琴音か。……まあ、しょうがない。食つてからにするか。

「じゃあ、食つてから外で遊ぶぞー！」

「そうですね！うーみん先輩、ユキが超特大サイズを作つてあげますからね！」

「お、雪だるまか？ いいよなあ、特大の雪だるま」

「煙こもる。雪うつれ声です」

ハナダカム。

「カイー！早くするんヨー！！」

「分かつたよ。そこで待つてろ」

俺は台所に秘伝の特大クリスマスケーキを、みんなの前に出した。

あれ？ これ海兄いが作つたの？」

琴音が一目見て俺の手作りだと見抜いた。

「なんでわかつたんだ？」

自分で書いたのもあるが、今日は店にも引けを取らないでコレーショントラップのはず。

ちょっとややこしいじゃや、分からなこと思つのだが……

「……箱。ケーキの入つてた箱」

琴音が呆れながら、俺の持つているケーキの箱を指差した。

あ、そうか。

作ったわいいけど、ケーキの入れ物が無く、仕方ないから小型の段ボール箱に……。

「しかも、ケーキのチョコのやつ、なにがあつたんだよ?」

秋が言つた。

「い、いやー、実は途中で分かんなくなっちゃつてさ。下手な鉄砲も数打ちゃ当たるつてやつ?」

「……いや、だからこゝれは無いだろ。ちゅがに」

「先輩……適切すぎません?」

ちょ、分かつてるよ。

みんなしてそんな目で見るなよ。

『W ミス Merry メリーチョコ』はそう書かれている。

「海、『Merry Christmas』だからな。そのくらい覚えとけよな」

「ひめせえな。ちゅうと不忘れただけだつての……」

俺をバカ扱いしやがつて。

時間が無かつたんだじしょうがないんだよ。

「じゃあ何で最初に『W』書いたんだよ。しかもミスつたんなら上

から塗つづぶせよ

「うむせえな。チヨコが逆さまだつたんだよーーー。」

「なんだそりゃ」

「これは本当の事だ。

苦し紛れの言こと訳ではない。

「それにしてもひどいですね。琴音たちもそう思つません?」

ユキがわざから無言の琴音に話をふつた。

「えー? あ、あ、あ、ああそうだね。でも、海兄にだつて頑張つて作つたんだしーー!そんなことどうでもいいと思つよーー。」

「……まあ、そうですね。琴音つひの言つとおりです。早く食べましょうですー。」

「あ、ああ。そうだな。海ー悪いんだけど、ケーキ切つてくれないか?」

「わ、わかった。今切るからまつとけ」

「うじて、俺はケーキをみんなに分けた。

ちなみに、オメガはずぶ濡れだったので着替えてきていたらしい。
どうで途中から姿が見えないとthoughtたんだ。

なので、オメガも参加して、俺たちは朝っぱらからケーキだ。普段なら高いから絶対に買わない、瓶のカルピースを注ぎ、みんなこたつを囲むよいつに座った。

「ヨウはエメリィーヌあげよつと思つたのだが、エメリィーヌが琴音にプレゼントしたのを俺は見逃さなかつた。

「おい琴音。気にすんな。明田があるぞ」

ずっと暗い琴音を、一応俺が元気づけておく。

「そうだ。明日があるのだ。

たかが英語が分からぬくらいで落ち込んでるんじやないぞ琴音……」

「海兄い！別に、落ち込んでないから平氣だよ！海兄いのやつのどこが間違ってるのかが分からなかつたくらいで落ち込んでなんか……ないよ」

うやうけ。

「そりや、ちよつとぐらにはおかしこと思つたけどさ……、秋兄いが分かるのに私が分からない訳なししゃ……はあ」

すっかりがつくしムードだ。
くや、しょうがない。

元気づけるしかないな。

でもどうよつか。

俺が悩んでいいと、たすがは兄貴。やつむる。

「なあ琴音、気にすんなよ。まだいいじゃねえか。英語『だけ』苦手なんだから。俺なんか、ほとんじ苦手だぞ……そりにいえ、海なんかいつも赤点ギリギリだぞ……」

ちよ、なに勝手に俺の学力ばらしてくれてんねん。

「うん！わかつたよ。もつ平氣……その前にケーキが食べたくなった！」

「じゅあ、みんな行くぞ！」

俺の合図と共に、みんながジュース入りのコップを持つ。

そして。

『メリークリスマス……』

やつむいながら、コップを上にあげ、みんなで叫んだのだった

そのあとはみんなでケーキを食べ、外で遊び、楽しく過
『』した訳だ。

てか、外で遊ぶ所も書けよ。雪で遊ぶ所も書けよ。手を抜くな作者。

……まあ、綺麗の終わったので良しとする。

それじゃーみんなーメリークリスマスーーー！

そして作者から一言ーーー。

『……これが終わったらもしや、元旦の話も書かなくちゃいけなくなるのか……？』

はい、綿りの無いお言葉ありがと。つ。

じゃ改めて、メリークリスマスーーじやねーーー！

クリスマス特別編！！ 完

俺曰く！クリスマス特別編！（後編）～メリークリスマス～～（後書き）

読んでくれた皆様。

ありがとうございます。

エメリィーヌのプレゼントの中身。 恭平^{オメガ}の縄の行方。

気にならないでください！！

それじゃみなさん！メリークリスマス！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7429z/>

俺日!季節の特別短編集！！

2011年12月25日19時55分発行